



IP SJ Magazine

[巻頭コラム]

情報社会—Hearing, Watching から Inspiration へ

■ 川口 淳一郎

SNS やモバイル、スマホに囲まれ、いたるところに防犯カメラのネットワークが出現している。

あらゆることが情報化され、我々をとりまく環境も便利になった。

情報社会の発展は、一面では、現場からの隔絶を招く。1960年代から運用されてきたロシアのプロトンロケット。半年ほど前に、打上げに失敗した。原因は、角速度センサの取り付け軸の方向が逆だったため。つまり右にそれたら、ますます右に舵をきることになり、ついには地面に激突して炎上することとなった。情報伝達手段の拡充は、省力化を助ける。ネットワークや回線で、digital 値、数字を送ることは、今や常識である。居ながらにして点検が行える。しかし、省力化は、作業の形骸化を呼び、現場での極性確認すらを怠り、リスクと化してしまう。プロトンロケットの失敗は、その一例であろう。Hearing is believing. Watching is believing. に陥ってはならない。

信頼性確保が、計画の遂行を過去の徹底的な点検へと向かわせる。点検票（ベリフィケーションマトリクス、通称ベリマト）や、チェックシート。宇宙開発には、そういったものがあって、どれだけ徹底したかで、その成否が決まる。分かりやすい話で、そう確信している人も多いことだろう。しかし、実は、「はやぶさ」のような宇宙探査機には、あらかじめそんなものが用意されていることはない。宇宙探査機は、いわば初物だからである。チェックシー

■ 川口 淳一郎
宇宙航空研究開発機構 シニアフェロー

1983年東京大学大学院工学系研究科航空学専攻博士課程修了。工学博士。同年文部省宇宙科学研究所助手。2000年文部科学省宇宙科学研究所教授。2011年宇宙航空研究開発機構シニアフェロー、現在に至る。



トを作ることが、宇宙探査機プロジェクトと言ってよいのである。ベリマトやチェックシートで点検されるのは、最初に作った人の範囲までである。それを越えた領域に目を届かせるのは難しい。

「ゼロ・グラビティ」という映画。既定外の工夫が事態を切り開かせる。危機的な状況の中で、ストーン飛行士はエンジンの起動を試みんとマニュアルを引っ張り出す。しかし、エンジンは起動せず、彼女の希望を打ち砕き、悲嘆の叫びへと突き落としていく。自らの死を覚悟するなか、亡くなったはずの同僚が現れて、着陸用エンジンは軌道変更にも使えるのだと囁く。彼女は、本来の使い方以外の、そのマニュアルを超えた手段を講じて、危機を脱していく。それは、マニュアルという既成方法の収録には書かれているはずのないソリューションだった。

チェックシートや、マニュアルから離れることこそ、最大のリスク管理であり、それが創造というものである。創造こそが、Inspiration こそが、最良のリスク回避策であることに気づいてほしい。情報社会、オペレーション、それらは管理という、視野を既成範囲にだけせばめる環境を作り上げてしまいがちである。Inspiration、情報社会が進めば進むほど、その重要性を増している。

